

## 「ジンバブエ地域社会調査」についての研究

### －「2000年度予備調査データ」分析結果－補足－

岩 淵 剛

**要 旨** This essay is the supplement to my former one written on “*Bulletin of Okazaki Women’s Junior College*” Vol. XXXVI, March 2003. Through discussion with Zimbabwean interviewers and Academicians about Research Data as well as some reference Books, I could have much clearer and fruitful definitions of concepts of “Peasant Farmer”, “Small Scale Farmer” and “Farm Laborer”. This information will assist us to make effective policy for poverty alleviation of Sub-Saharan Rural African.

#### はじめに

本稿は、「2000年度ジンバブエ地域社会調査」データの、「農業経済調査」に関する部分の報告（『岡崎女子短期大学研究紀要』第36号、2003年3月25日発行、p.55～66）の内容を、2003年8月5日～9月6日までの現地滞在中に、面接調査員であったマズンダ地区およびカドマ地区小学校教員、ならびにジンバブエ大学の研究者たちとの討論をもとに、一部修正および補足することを狙いとするものである（注－1）。

#### 1. “Peasant Farmer” は、「小作農民」ではなく、「小農」あるいは「共同体農民」

上記『紀要』第36号での報告の中で取り上げた、「Small Scale Farmer 小規模農民」と「Peasant Farmer 小作農」の区別についてであるが、現地関係者との共同討論その他を通じて、次のことが明らかになった。

(1)ジンバブエには、そもそも「小作制度」は存在しない。したがって、“Peasant Farmer”の訳語は、「小作農民」ではなく「共同体農民」が正しい。また、「小作料」も存在せず、“Rental”は「小作料」というよりむしろわが国の「固定資産税」に近い。つまり、ジンバブエにおける農業の歴史的経過があって、国家に“Rental”を納めるのである。

すなわち、1980年の独立前の白人による少数支配の時代には、これらの黒人たちは、農地としては条件の悪いごく狭い土地に囲い込まれていた。しかし独立後、彼らは囲い込み地から解放されたが、もともと狭い土地しか持っていない貧しい農民である。したがって独立後、これらの農民の貧困緩和のために、囲い込み地周辺の土地を、「共同体農民」が共同で自由に使える土地とした。そのいわば使用料に相当するものが“Rental”である。しかし、旱魃等で「共同体農民」が飢饉状態になったときなどは、州政府の裁量で“Rental”を免除することもできるとのことであった。

(2)ジンバブエ大学の研究者は、日本側のこの問題提起、つまり「小規模農民」と「共同体農民」の概念の違いのあいまいさに関して、次のような回答を文書で提出してきた。（注－2）

「“Peasant Farmer”は、ジンバブエの農村地域に一般的に見られ、さまざまな作物が栽培されるごくわずかの農地（畑）しか持たない農民である。“Peasant Farmer”は、牛を数頭飼っていたり、まったく飼っていなかったりもする。穀物生産は、主として生存のために行われる」。

「共同体農民とは、通常農村に住む“Peasant Farmer”をさす。彼らは、Rentalを払わないごくわずかの農地・耕作地しか持たない。この土地は、生得権（Birth Right）として与えられる、

無償の土地である。通常、これらの農民の多くは、放牧地や水資源等を共同利用し、よく集団であるいは共同で仕事をする。共同体農民あるいは“Peasant Farmer”による農業は大変小規模で生存目的のものであり、ごくわずかの収穫しかなく、しばしば食料、衣服、そして子供たちの授業料を含む家族の必要を満たすのにも足りない」。

つまり「共同体農民」とは、家族を養うのにもぎりぎりの「生得権」としてのわずかな農地と少数の家畜をもち（あるいはもたない場合もある）、その土地の周辺の土地を共同利用地として利用する事が出来るだけの、貧しい農民達の事を指す。

(3) 高校生向けの地理の教科書では、「共同体農民」についての説明は次のとおり（注－3）。

「ジンバブエでは、共同体農民は、国土の50%以上を占め（別図1）主として準－生存農業農民（quasi-subsistence farmer）である。彼らは、肉牛、やぎ、羊の放牧と養鶏を行い、同時にとうもろこし、ラポコ、キビ、ソルガム、落花生のような食糧作物をも栽培する、混合農業を実践するのが常である。共同体農民は、今日では、大量の換金作物、特にとうもろこし、綿、ソルガム、ひまわりを生産している。例えば、降雨に恵まれた年には、今日ではとうもろこしの50%以上、販売される綿の60%以上を生産している。

マニカランドやマシヨナランド州の相対的に湿潤な地域では、穀物生産特にとうもろこしの生産が重要である。相対的に乾燥した西部及び低地地域では、家畜が一層重要であり、農民達は、ソルガムやキビのような相対的に乾燥に強い食糧作物を栽培する。肉牛やロバは、一般に旱魃対応動物として利用され、肉牛の堆肥は、畑を肥やすために使用される。動物達は、順に作物の残り物を餌にする事を認められ、そのようにして統合された畜産穀物生産農業システムが出来上がる。このことが意味するのは、二つのタイプの農業が結合されているということである」。

つまり、ジンバブエ人口の50%を占めるといわれる共同体農業地域の農民の農業形態は、一般的には畜産と穀物生産が統合されたもの、つまり混合農業であるということである。

「共同体地域の土地は、共同体によって所有されている。全ての共同体成員は、小さな耕作可能地と共同体牧草地の一部の利用資格を与えられている。共同体の土地全部のほぼ90%は、相対的に

乾燥した地域にあり、この地域は耕作農業より畜産にいつそう良く適している。これは、植民地時代からの土地所有制度の結果である」。

すなわち、「共同体農民」の乾燥地での混合農業というあり方は、植民地支配の歴史的遺産であるということである。

そして、「共同体の土地での生産を支配する主な要素」として、以下のものがあげられる。

①「土地所有は、一般的に小さく（2－6 ha）、土地は乾燥地域に位置する（年間降雨量の範囲は、450mm－700mm）のである。

②労働は、雇用労働が綿摘み時期のような農繁期には使用されるかもしれないが、主に農民とその家族によって供給される。若者の都市に向かう傾向のために、利用できる労働力は、大部分は相対的に年齢が上の人々と子ども達である。

③この農業の収穫高は、低い。AGRITEX（注－4）の仕事は、徐々にではあるが確かな改善を結果として作り出してきた。顕著な前進が成し遂げられたのは、肥料の広範な使用、改良種子の使用、害虫駆除、タバコ、綿、ひまわり、落花生のような換金作物の生産の増加である。

④「農業名人（master farmer）」計画は、ある共同体農民を腕のいい準商業農民に変え、これらの人々が多くのそれ以外の人々に影響を与えてきた。この計画の主な問題点は、このように働く職員が足りない事である。現在の所、こういった職員と農民との比率は、1対800である。その結果、こういった職員は、個人よりグループを通じて仕事をする事を好む。

⑤資金の入手可能性が、主要な問題である。年間の（現金）収入は、低い。大抵の共同体農民の世帯はまた、都市地域や商業農場で働く親戚から、（現金）収入を受け取る。この一般的な資金不足が、農民が購入することが出来る資金投入量を制限する。融資の便宜は、今日では農業財団（AFC）から受ける事が出来るが、（それが可能な）その他の政府機関は限られている。というのは、共同体農民は融資に対する保障を提供できないからである。大抵の銀行、例えば農業銀行（AGRIBANK）は、今日では農業融資（Agro-loan）を提供する。この融資の便益は、個人が扱うのが大変難しいので、通常は協同組合グループに限定されている。

⑥旱魃対応力（draught power）は、動物特に肉

牛によって与えられる。そして、ロバとロバの入手可能性とが、生産性をきめる。研究によって示されたのは、容易に旱魃対応動物を手に入れる事が出来る農民は、自分の畑を丁度良い時期に耕す事が出来、それが出来ない農民より高い収穫を得ることが出来るということである。しかしながら、旱魃対応動物、特に肉牛に対する要求は、肉牛のそれ以外の使用と結び付けられて、供給過剰という結果を生み出した。これは、過剰食草と環境悪化をもたらした」。

ここには、「共同体農民」の農業の特長が、かなり突っ込んで挙げられている。これら農民の農地は、2－6 haと狭く、年間降雨量450－700mmの乾燥地に位置する。農作業は、農繁期を除いて主として家族で行い、中高年者や子どもが主な働き手である。「農業名人」計画などを用いて、これら農民の農業技術向上を目指してきたが、指導者数が足りない。資金不足が、これら農民の主要な問題である。家畜特に肉牛が旱魃対応動物になっているが、こういった動物を持っているか否かが収穫を左右する。またこれらの動物のもちすぎも、過剰食草や環境悪化を引き起こす。

## 2. 「Small Scale Farmer小規模農民」の正確な意味

- (1) 上掲『紀要』で言及した“Small Scale Farmer”に関する疑問は、これらの農民が、「共同体農民」や日本の農民の場合と比べると、はるかに広い農地を持って農業をやっているにもかかわらず、“Rental”を払い、現金収入が著しく低く、子どもの授業料も払えない場合が少なくないのはなぜかということである。
- (2) ジンバブエ大学の研究者達は、日本側のこの問いに対して、次のような回答を与えている。

「この農民は、穀物生産と肉牛放牧がともに行われる、農地の指定された区域をもつ。ジンバブエにおける小規模農民は、主として第3, 4, 5農業地域に見出されるが、この地域は一般にごく僅かの雨にしか恵まれないのがほとんどである。穀物と動物（主に肉牛）両方の混合農業が、行われている。穀物生産は、共同体農民の穀物生産－現金収入源として販売のためにしばしば残されるものを僅かしか持たない－より、僅かにましであると思われる」。

「小規模農民は、かなり広い土地をもち、……。

その土地は、実際は購入されたものであり、農民は、地域の自治体に固定資産税を納める。この農民はしばしば肉牛を飼い、混合穀物生産農業を行う。通常は、家族が提供する労働で充分であるが、臨時の労働者を労働者として雇う事もある」。

ジンバブエ大学の研究者達の説によると、「小規模農民」は、農業をやるにはかなり条件の悪い所に立地せざるを得なかったということである。

ジンバブエでは、農業地域を主として年間降雨量に対応させて、5～6種類に区分している。（別図2参照）第3, 4, 5農業地域とは、次のような地域のことを言う（注－5）。

第3農業地域：準集約的農業地域……年間降雨量が600～700mm、実質的に農業に有効な降雨量が400～510mm。したがって、旱魃の危険がかなり高い地域。準集約的混合農業システムが推奨される地域。ここでは、基本は、ソルガムのような旱魃に強い作物の栽培、家畜、特に肉牛の飼育である。とうもろこし、綿、大豆も栽培される。

第4農業地域：準粗放的農業地域……西部の草地高原地帯。国土の3分の1。年間降雨量が450～650mm。実質的に農業に有効な降雨量が350～450mm。旱魃が頻繁に起る。したがって、農民が灌漑を利用可能なところでだけ、穀物が栽培される。大部分の農民は、肉牛を飼育し、飼料作物を栽培する。灌漑が利用可能なところでは、綿、ソルガム、落花生を含む多くの作物が生産される。

第5農業地域：粗放的農業地域……年間降雨量600mm以下、実質的に農業に有効な降雨量は400mm以下。年間平均気温は、23℃と高い。牧畜がお勧めである。しかし、草原の家畜飼育能力は非常に低いので、牧草地は数千ヘクタール以上にも上る。肉牛飼育のほかに、何人かの農民は、狩猟のためのゲーム牧場を運営している」。

したがって、「小規模農民」も、かなり広い農地を私有してはいても、穀物栽培と家畜飼育の両方を含む混合農業に取り組まざるを得ない。しかも、雨が少ないため絶えず旱魃の危機に脅かされ、牧草地も広大な土地を確保しておかなければならない。「共同体農民」よりはましにしても、生産性も低く、現金収入の道もあり無い。

- (3) したがって、ここで言う“Rental”は、当然のことながら「借地料」ではなく、「固定資産税」ということになる。その正確な額はわからないが、

「高い」とする者が、マスンダで50%を越えていた。そして、その残りの50%弱の者が、税を払っていない、つまり税を免除されているということであろう。すなわち、それだけ頻繁にしかも大きな比率で、早魃にあっているということであろう。

### 3. 「Farm Laborer 農業労働者」の意味

- (1) 我々日本側は、「農業労働者」とは、主として「大規模商業農家」に雨期の農繁期になると雇われ、それが過ぎると次の働き口を探して、時には家族とともに国境を越える移住をも余儀なくされる農業賃金労働者のことをさすと考えていた。しかし、ジンバブエ大学の研究者によると、これらの人々は、「小規模農民」や「共同体農民」に雇われる事も少なからずあるようである。
- (2) 「小規模農場と共同体農場の両方の場合には、農業労働者とは、通年雇用されるあるいは季節雇用される人で、それらの農民の農業活動を助ける人の事である。通常、農業労働者は、ごく僅かの支払いしか受けておらず、しばしばどんな専門的あるいは熟練した農業技術及び知識をも持っていない」(注-6)。

「小規模農民」や「共同体農民」に雇われている農業労働者は、おそらく農村地帯の住民の中の最底辺をなす者であろう。農業に関する専門的な知識や技術を持たず、貧しい「共同体農民」に農繁期だけ何とか雇われて生活するこれら「農業労働者」の生活実態は、もっと詳しく調べる必要があるであろう。

### 4. 「共同体農民」の生産性の低さ

- (1) 「共同体農民」の生産性の低さについては、ジンバブエ大学側の研究者も、やや詳しく次のように述べている。

「歴史的には、共同体農民及び小規模農民はともに、平均してごく僅かの降雨しか得られない農業地域3, 4, 5の地域に住まわされた。その結果、彼らの収穫もまた、しばしばほんの僅かにしかない。僅かの収穫が更にまたひどくされているのは、貧弱な農法、適切な農法がないこと、十分な農業機械や早魃対応力がないこと、そして種子や肥料を購入する十分な資金がないことによってである」(注-7)。

つまり、「共同体農民」や「小規模農民」が住

まわされてきた地域は、もともと雨が少ない地域なので農業に向いているとはいえない事、おまけに農業知識や技術、農業機械、資金など、困難な自然条件に有効に対応するための条件が揃っていないということである。それらの条件の不十分さが、彼らの大半の者が自分達を「貧しい」と見なす現実を作り出す原因になっているという。

- (2) さらに付け加えているのは、「共同体農民」や「小規模農民」が、日本の農民などに比べるとはるかに広い農地を持っているのに、なぜ土地利用度が低いままなのかというわれわれの問いに対する回答である。

「両農民とも、かなり広い耕作可能な土地を持っているにもかかわらず、さまざまな要因のために生産高は僅かである。マスンダ及びカドマともに、相対的に少ない降雨しかない地域であることを考えると、これらの農民が農業用水調節力(moisture conduct)を増やす灌漑設備を持たないこと、このことが彼らの状況を悪化させている。また、前述のように、両農民とも肉牛をも飼っており、草を食うための牧草地が必要となる。そのため、一定の土地は、その目的のためにそのままに残される。穀物栽培は厳密に季節的に行われれば4ないし5ヶ月続く夏の間だけ行われるので、冬と秋の間は、穀物耕作地と草地とはともに草地になる。その時期以外の期間は、穀物耕作地は非生産的であり、農民たち自身は生産的なことは何もしない」。

つまり、これらの小規模農民は灌漑設備を持たないため、穀物栽培は雨期にしかできないということである。乾期には、この穀物栽培地をも飼っている肉牛のための放牧地として利用するしかないのである。

- (3) 穀物生産量の貧弱さは、人工肥料及び天然肥料(肉牛の堆肥)の使用法によっても、少しひどいものにされる。……動物の堆肥を使用しなかった農民は、おそらく肉牛を持っていなかったのである。というのも、伝統的にはジンバブエ人は、自分の畑に肉牛の堆肥を使用するのだから。化学肥料は非常に高価であった、それでそれを使用する農民も、十分な量を使用するかどうかには、はっきりした自信を持つことができなかった。反対に、両地域とも一般的にはわずかの雨しかないという事実から見ると、化学肥料や堆肥の使用が、灌漑によって増やすことができないほどの雨不足の場合には、しばしば収穫を減少させる機会を増やし

た」。

この記述の詳しい内容は、必ずしも明らかではないが、ジンバブエにおける農業では、雨の量に対応した化学肥料及び堆肥の使用のかなり微妙な調整が必要であることが、ここから伺われる。つまり、灌漑用水の利用にも限界があつて、灌漑によって補いきれない雨しかないときには、化学肥料や堆肥はかえて収穫量を減らすことになるというわけである。

## 5. 「共同体農民」「小規模農民」の現金収入の低さ

「農業経済調査」の結果、これら農民の過去5年間の収入、支出、利潤の額が、信じられないくらいに低く、われわれは、どう見ても現物取引で処理されている世界が圧倒的に多いと考えざるを得ないとしていた。この点についてジンバブエ大学側は、次のようにコメントする。

「共同体農民が、自分たちの消費のための十分な食料をほとんど持たず、小規模農民も時々販売するための特別のものを手に入れるだけだとすれば、これらの農民たちは、確かな（現金）収入源を持たないのである。また、穀物栽培農業が、家族の希望及びすべての必要物の源を与えるとすれば、現金はまさしくそこには存在しないのである」。

これも、これ以上の詳細は不明であるが、われわれの推定どおり、ここには、現金のやり取りを介在させない、広い自給自足・現物取引の世界が存在するということである。したがって、この自給自足・現物取引がかえって逆に、ジンバブエにおける激しいインフレから、これらの農民たちを守る役割を果たしているともいえるのである。

## 6. 高いインフレ率と低い農業経営能力

ジンバブエ共和国が、ここ数年高いインフレに苦しめられてきたことはよく知られている。ジンバブエ大学の研究者は、このことについて次のように言う。

「ジンバブエでは、インフレ率は、2001年から2003年まで100%から400%までの間で推移した。」この激しいインフレの影響から、これらの農民は、当然のことながらまぬかれることは出来ない。

「自分たちでは、これらの農民たちはまた、簿記の基礎、記録保管、基礎的農場経営技術を身に

つけてはいない。農業機械の入手可能性やその使用さえもが、極度に不十分で、マスンダやカドマでは80%の農民がこれらの不十分さに合意している」。

つまり、激しいインフレ状況の中では、その影響を最小限に食い止めるためにも、自分たちの農業経営の実際を正確に知り、経営上の問題点を速やかに取り除いてゆかなければならないはずである。ところが、そのための基礎的な知識や技術が、これらの農民には欠けているのである。

## 7. 「小規模農民」「共同体農民」に雇われる「農業労働者」の困難

- (1) われわれの考察では、「農業労働者」とは主として、「大規模商業農民」に雇われて働く賃金労働者であった。しかし、本稿3で見たように、「小規模農民」や「共同体農民」に雇われて働く「農業労働者」も存在するのである。このような農民の生活の現実はどうのようなものであろうか。ジンバブエ大学の研究者のコメントを見ることにする。

「小規模農民や共同体農民は、季節的に活動するように思われるので、農業労働者の概念は、あまりはっきりしない。時々、あちこちで、これらの農民のうちの誰かが、これらの人々の一人か二人を、臨時の労働者として常時あるいは一時的に、自分たちの財力に応じて雇用するかもしれない。したがって、労働者は、行うと思われることについては、よく知らないのである。しばしば、農業労働者は、ひどく貧しく十分な支払いを受け取れない。それゆえ、彼らは、実際に労働の需要に身を任せることをしない。たいていの場合、これらの労働者は、ただ単に肉牛の世話の手助けをするだけである」。

つまり、「小規模農民」や「共同体農民」によって雇われる「農業労働者」の社会的地位は、著しく低い。彼らはおそらく、彼らを雇う共同体農民よりも貧しく、社会的地位が低い。

- (2) 「小規模農民やその労働者にとっては、しばしば子供たちのための学校が非常に遠く、距離は平均して片道10～15kmある。この点では、共同体農民の方が少し楽である。農業労働者の賃金は、農民と労働者の間で交渉によって決められる。したがって、しばしばそれは、まったくのところ十分なものとはいえない。マスンダ地区の労働者の

88%は、自分たちの給与は低すぎると感じていた」。

「農業労働者」の子供の通学距離がなぜ長いのかの謎が、少し解けた気がするコメントである。「小規模農民」は、「大規模商業農民」ほどではないが、広大な未耕作地あるいは牧草地を含む農地を所有する農民である。そこで雇われている「農業労働者」の子供の通学距離は、必然的に長いものにならざるを得ないということである。「大規模商業農民」の場合は、かなりたくさんの「農業労働者」が農場内に集団で住み、通年であるいは季節的に雇用されるのであるから、学校も農業労働者の居住地近辺に建設可能であろう。

注-1 Masunda での検討会は、マスンダ北小学校で、面接調査員であった同小学校教員7名の参加の下に開催された。Kadoma での検討会は、カドマホテルを会場にして、面接調査員であった Chedonje Primary School, Matin Spur Primary School, Mayflower Primary School の教員達9名の参加の下に、開催された。「ジンバブエ地域社会調査ジンバブエ協会」との「2000年度予備調査」データの分析検討会は、9月2日、ジンバブエ大学の Dr.Chisaka 会長の研究室で、同大学の若手研究者で会長の共同研究者でもある Mr. O. Mavundutse、Mr. C. Munetsi、遅れて、環境学科長でもある Dr. C. M. Mukora、それに「エコークラブ」現地代表であり、マスンダでの調査員でありまとめ役でもあった、マスンダ北小学校長 Mr. D. Madzingira と岩淵の参加の下におこなわれた。各検討会においては、日本側からは、2003年4月10日付で日本国外務省に対して提出した、「調査研究報告「2000年度予備調査」における「農業調査」の概要について」を岩淵が英訳した、*Rsearch Report, About the Outline of "Agricultural Research" in "2000 Pilot Research"* (A4で5ページ)を用意し、それを下に検討を進めた。

注-2 ジンバブエ大学側から提出されたのは、8ページの手書きのレポート、*An Outline on a Pilot Study on Agricultural Research Carried out in Two Areas in Zimbabwe, compiled by Mr. O. Mavundutse and Mr. C. Munetsi* であ

る。

このレポートは、前日9月1日に岩淵が提供した日本側の報告書を読んで、若手研究者二人が協力して9月2日の検討会に間に合うように作成したものである。したがって、このレポートは、ジンバブエ側が元の調査データを自分達で分析した結果を纏めたものではない。日本側のレポートにあったいくつかの基本的な疑問・問題点について、ジンバブエ人にとっては周知の事実を含めて、レポートに纏めたものと思われる。したがって、もとのデータの分析・考察を、改めて帰国後に Chisaka 会長に要請したところである。

注-3 L Mutsvangwa, E Nhadara, J Noko, W Shumbayawonda, *Geography Today Human and Economic*, Revised Edition, Form 3 and 4, Zimbabwe Publishing House, 2001, p15-16.

注-4 AGRITEX は、ジンバブエ政府の Department of Agricultural and Technical Extension Services の略。筆者の見聞では、この言葉は、政府の部局を表すだけでなく、そこに所属する農業技術者そのものをもさすようである。主として農業技術指導者として、農村地帯に派遣されている。農民に農業技術指導を行う能力だけでなく、農業土木、農業経営についても広い知識・技術を身に付けており、灌漑用ダム建設地の選定、設計についての助言、経費の見積もりの能力と資格ももっているようである。しかし人数が足りず、きめの細かい持続的な指導・助言を受ける事が、容易ではないようである。

注-5 これは、上にあげた高校生向け地理の教科書の記述である。(Geography Today, p14-15) しかし、ジンバブエ政府の「中央統計局」(Central Statistical Office) が発行している『共同体のうちにおける農業・家畜調査 1993/94』(*Agriculture and Livestock Survey in Communal Lands 1993/94*), December 1996 によると、少し内容が異なる。

「ジンバブエは、土壌のタイプ、降雨量やその他の気象要因に基づいて、5つの自然による農業地域に分けられる。はじめの3農業地域は、集約的な穀物生産や畜産に向いている。ところが、残りの2つは、農業開発に対して、限られた余地しか与えない」。こうして、5つの農業地域を、次のように与えている。

「農業地域1：専門化し多様化した農業

雨：標高1700M以下の地域で、年間1000mm以上、それ以上の標高のところで年間900mm以上。

生産：造林と果樹生産と畜産。霜の降らない地域では、茶、コーヒー、マカダミアナッツ及びそれ以外の農園作物。

地域：7000平方km（ジンバブエ全土の2%以下）。

農業地域2：集約農業

雨：年間750-1000mm。この農業地域の一部では、一定の年の穀物生産は、相対的に短い雨期あるいは雨期の間の乾燥した時期によって、影響される。

生産：穀物生産と集約的畜産。

地域：58600平方km（ジンバブエ全土の

15%）

農業地域3：準集約的農業

雨：年間650-800mm。かなり厳しい、雨期における乾燥した時期がある。

生産：飼料作物及び換金作物栽培とともに行われる畜産。とうもろこし、タバコ及び綿の副次的な生産。

地域：72900平方km。（ジンバブエ全土の19%）

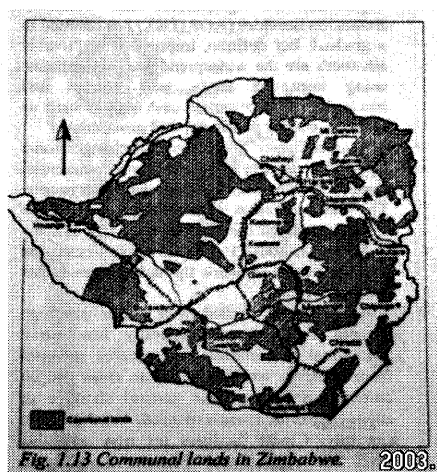
農業地域4：準粗放的農業

雨：年間450-650mm。周期的に襲う旱魃と雨期の間の厳しい乾燥の時期。

生産：畜産、旱魃耐性のある穀物。

地域：147800平方km。（ジンバブエ全土の38%）

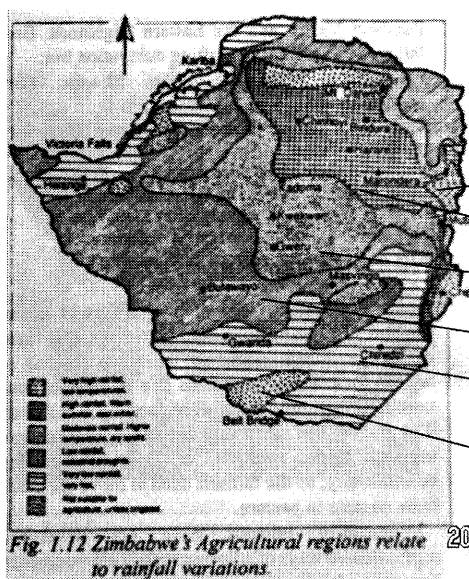
農業地域5：粗放的農業



ジンバブエの共同体農地（斜線部分。国土全体の50%以上を占めるという。）

ジンバブエの高校生向け教科書『今日の地理』 *Geography Today Human and Economic*, p 15.

（別図1）



降雨量の変化に関連して区分された、ジンバブエの農業地域

農業地域1

1000mm以上

農業地域2:

700-1000mm.

農業地域3:

600-700mm.

農業地域4:

450-600mm.

農業地域5:

600mm以下。

農業地域6

高校教科書『今日の地理』 p 14.

（別図2）

雨：旱魃耐性のある飼料生産や換金作物の生産にとっても、あまりにも少なくしかも不規則。

生産：粗放的な肉牛放牧あるいはゲーム放牧。

地域：104400平方km。(ジンバブエ全土の27%)」

注－6 この部分は、ジンバブエ大学の研究者による。父親を異にする複数の子どもを抱えた独身女性である共同体農民が、農村社会の最貧困層をなすと考えていたが、「小規模農民」や「共同体農民」に雇われて生活する「農業労働者」も、それに劣らず貧しい農民層である事が伺われる。この層の存在には、我々は気付かなかった。

注－7 農業の生産性の低さは、サハラ以南のアフリカ農業に共通する現象である。アフリカ農業研究の専門家でもある日本アフリカ協議会の高瀬国男は、サハラ以南のアフリカの貧困改善・解決のための、農業生産性向上の課題を強調している。平野克巳も、とうもろこし(メイズ)、米、小麦といった主要穀物の土地生産性を国際比較しながら、アフリカ農業の土地生産性の低さを強調する。「南米もアジアも……急速に収量を向上させているのに、一人アフリカだけが延々と停滞している。アフリカは発展の途上にあるのではなく「成長していない」のだ……」(平野克巳編『アフリカ比較研究』アジア経済研究所 2001年p63～)。

【参考資料】 農業調査データの日本側分析結果

(英訳)

Echo Club International, Japan

10 April 2003

The Minister of Foreign Affairs in Japan

### Research Report

### About the Outline of "Agricultural Research" in "2000 Pilot Research"

1. Purpose of this Research: The Purpose of this Report is to make clear "Agricultural Management" Problems of the Farmers ('Small Scale Farmer', 'Peasant Farmer', 'Farm Laborer') who have difficulties on school enrollment and / or schooling in 2 Areas in the Republic of Zimbabwe, Masunda Area in Masvingo Province and Kadoma Area in Mashonaland West.
2. Interviewers, Way of Interview, Term of Interviewing, Sampling of Interviewees, number of Interviewees etc.
  - (1) Interviewers : Primary School Teachers working in respective School  
    <Masunda>: Teachers of Masunda North Primary School  
    <Kadoma> : Teachers of Chedonje Primary School, Matin Spur Primary School and Mayflower Primary School
  - (2) Way of Research: Depending on Questionnaire, Interviewers interview interviewees personally and respectively to describe their responses on it.
  - (3) Term of Research:  
    <Masunda>: 17 / 09 / 2002-05 / 10 / 2002  
    <Kadoma>: 11 / 10 / 2002-13 / 10 / 2002
  - (4) Sampling of Interviewees: According to preliminary defined categories and the number belonging to them, Interviewers come into the Interviewees' Dwelling Areas to interview them requesting their cooperation at their discretion.
  - (5) Areas, Categories and the corresponding number of Interviewees :



| Name of Area | Small S F | Peasant F | Farm L | Total |
|--------------|-----------|-----------|--------|-------|
| Masunda      | 40        | 36        | 25     | 101   |
| Kadoma       | 25        | 50        | 23     | 98    |

3. On this Research, Preliminary Remarks were delivered to Interviewers depending on the 'Manual' in order to get rid of wrong descriptions and / or lacks of description, because we had lots on former Research implemented at June and July 2001. Owing to this Remarks, we had fewer wrong descriptions and lacks of description than those on former case. But on account of lack of supervisor who conducted the Research from the Research as a whole, the number of Interviewees became inconsistent with distributions of the number according to the categories and Areas. As Input of the Data into Excel, Printing it out and Distribution of printed Data to all Academicians on both sides had been finished, Data-Analysis and Consideration of its Results should be done from now on both countries.

As this Research began as the International Joint Scientific Research Project, we are intending to have a Joint Meeting of two Associations\* about the Data-Analysis and Consideration (Evaluation) of them on August 2003( ? )

\*"Zimbabwean Association for Scientific Research of Zimbabwe's Rural Areas" is constituted from 5 Professors in Zimbabwean Universities, 1 Lecturer of Berbedere Teacher's College, 11 Primary School Teachers in Kadoma Area, 9 Primary School Teachers in Masunda Area and 1 Secretary.

"Japanese Association for Scientific Research of Zimbabwe's Rural Areas" is constituted from 4 Professors of Okazaki Women's College, one Associate Professor of Nagasaki University and two

specialists of agriculture as well as computer.

On this Joint Meeting, our target would be not only to analyze the Data and consider the Results but also to design our genuine Scientific Research depending on our Joint Pilot Research experience.

4. Our Data-Analysis is still now only at the beginning stage, but we would be able to point out the following problems in Zimbabwean Communal Agriculture which are brought to light.

(1) Ambiguity of the concepts of Communal Farmer.

As the Farmers Categories, which related with the difficulties of School enrollment and Schooling of children, we adopted 'Small Scale Farmer', 'Peasant Farmer' and 'Farm Laborer'. But according to the reality depending on our Research, the difference between 'Small Scale Farmer' and 'Peasant Farmer' is not necessarily definite not only among Farmers in themselves but also in the Areas. Especially, it is true in relation with the size of land property and the payment of rental of land. Land Surface and Rental of 'Small Scale Farmer'

| Name of Area | Land Surface | Payment of Rental |
|--------------|--------------|-------------------|
| Masunda      | 8 – 660 acre | 53.8%             |
| Kadoma       | 200 – 734    | 95%               |

(2) Low Productivity

Both in 'Small Scale Farmer' and 'Peasant Farmer', we cannot say their productivity is high. Most Farmers belonging to these categories recognize themselves to be 'poor',

| Name of Area | Small Scale Farmer | Peasant Farmer |
|--------------|--------------------|----------------|
| Masunda Area | 42.4%              | 25%            |
| Kadoma Area  | 40%                | 52%            |

'just enough to survive on',

| Name of Area | Small Scale Farmer | Peasant Farmer |
|--------------|--------------------|----------------|
| Masunda Area | 72.5%              | 54.5%          |
| Kadoma Area  | 56%                | 44%            |

The number of Farmers who feel themselves

to be 'rich' is small.

| Name of Area | Small Scale Farmer | Peasant Farmer |
|--------------|--------------------|----------------|
| Masunda Area | 2.5%               | 3 %            |
| Kadoma Area  | 4 %                | 4 %            |

Most Farmers who have the problems of School enrollment and / or Schooling cite the expensiveness of school fee as the main reason for them.

Agricultural land, which 'Small Scale Farmer' has is surely comparatively bigger than that of 'Peasant Farmer' and much bigger than that of Japanese Farmers, but the rate of utilization as arable land is low.

〈Average rate of utilization of agricultural land as arable land〉

|              |        |
|--------------|--------|
| Masunda Area | 83.5%  |
| Kadoma Area  | 20.44% |

Most agricultural land which the Farmers do not utilize as arable land is used almost as pasture. That is to say the rate of utilization of land as arable land is low, therefore the productivity of agriculture in 'Small Scale Farmer' should be improved drastically so that they can alleviate and / or overcome above-mentioned poverty. For the sake of this improvement, raising of utilization rate of their own agricultural land as arable land would be first of all necessary.

In the case of 'Small Scale Farmer', lots of Farmers have no irrigation system.

〈Rate of no irrigation system 'Small Scale Farmer'〉

|              |      |
|--------------|------|
| Masunda Area | 41%  |
| Kadoma Area  | 100% |

And also, lots of them are farming using chemicals and chemical fertilizer as well as manure.

〈Rate of using chemical fertilizer and manure〉

| Name of Area | Chemical Fertilizer | Manure |
|--------------|---------------------|--------|
| Masunda Area | 95%                 | 85%    |
| Kadoma Area  | 95%                 | 76%    |

The reason of using manure is rather 'easy to get and less-expensive' and 7 traditional' than

consideration of reducing land fertility by using chemical fertilizer They look like to have only a weak interest in the problem of using chemicals and chemical fertilizer.

(3) Low cash income

In Zimbabwe, there has been progressing more than 100% annual inflation during these years. Therefore, the level of annual income of Communal Farmers by means of selling their own agricultural products is extremely low, even if rapid raising of commodity price is overwhelming their income. On the Questionnaire, we asked annual income, expense and profit from 1996 to 2000. Not small number of Farmers look like not to have correct remembrance (record) of them, and pretty large amount of products look like to have been handled through spot transaction without being included in described annual money considered from every viewpoint.

Therefore, we are obliged to point out that these Farmers are weak in the consciousness of 'Agricultural Management' and lacking at the basic efforts as keeping household account, making a record about their own Agricultural Management etc.

(4) Agricultural Bases, Infrastructure and Agricultural

Machines which are not kept in good conditions Lots of Farmers do not have irrigation system, Distribution system of agricultural products is not necessarily kept in good condition,

|           |                  |       |
|-----------|------------------|-------|
| 〈Masunda〉 | in bad condition | 52.5% |
| 〈Kadoma〉  | in bad condition | 40%   |

and Farmers are responding that Agricultural machines are insufficient.

|           |              |     |
|-----------|--------------|-----|
| 〈Masunda〉 | insufficient | 80% |
| 〈Kadoma〉  | insufficient | 80% |

In order to alleviate and / or overcome the poverty problem of Communal Farmers, who occupy most part of Farmers (about 70% of Zimbabwean total population), raising Farmers' Productivity and increasing agricultural profit are inevitable. For that, it would be necessary first of all for them to equip irrigation system

and agricultural bases (infrastructure), which enable to endure somewhat shortfall of rain or draught. At the same time, it would be important for them to raise agricultural productivity per unit land surface increasing arable land and utilizing chemicals as well as chemical fertilizer within an appropriate limit. For the sake of that, the improvement of the supply of agricultural machines and Farmers' agricultural technology would be indispensable.

#### (5) Problems of Farm Laborers

"Farm Laborer" has been considered in Zimbabwe as the people who are employed by "Big Commercial Farmer" (mainly white persons) during the farming season, then transfer to the next workplace with their family sometimes over the boundary.

But according to the Research in reality, there were almost no "Farm Laborer" who transfer seasonally over the boundary. Of course, not small part of them consider "transfer" as positive depending on their idea that "transfer" is the "Tradition of their own ethnic Group". But big Commercial Farms with irrigation system would be able to continue agricultural production all year long, therefore for the "Farm Laborer" employed by them seasonal transfer would also be unnecessary.

These "Farm Laborer" constitutes poor social strata of the society, so lots of them are responding that they have difficulties of school enrolment and schooling on account of expensiveness of school fee.

〈Masunda〉 64%

Not small number of them is responding that they have difficulties of "Distance" and "Time" to go to school.

|           |          |     |
|-----------|----------|-----|
| 〈Masunda〉 | Distance | 56% |
|           | Time     | 36% |

They are wishing strongly the hike of their wages and improvement of their labor conditions.

〈Masunda〉 88%

Present Zimbabwean Government is requisitioning the land of white Big Commercial Farmers without compensation to

re-distribute it to black Communal Farmers. Like this, a part of "Farm Laborers" are shifting to Communal Farmers acquiring a certain amount of agricultural land. The consciousness of those new Farmers is different from that of the other social strata. Not a small part of them are conscious about themselves that they are "rich" economically and their agricultural productivity is "high".

The mentioned above.

Mr. Taku KAWAGUCHI  
The President of Echo Club International,  
Japan

Mr. Tsuyoshi IWABUCHI  
The Responsible Person of this Project